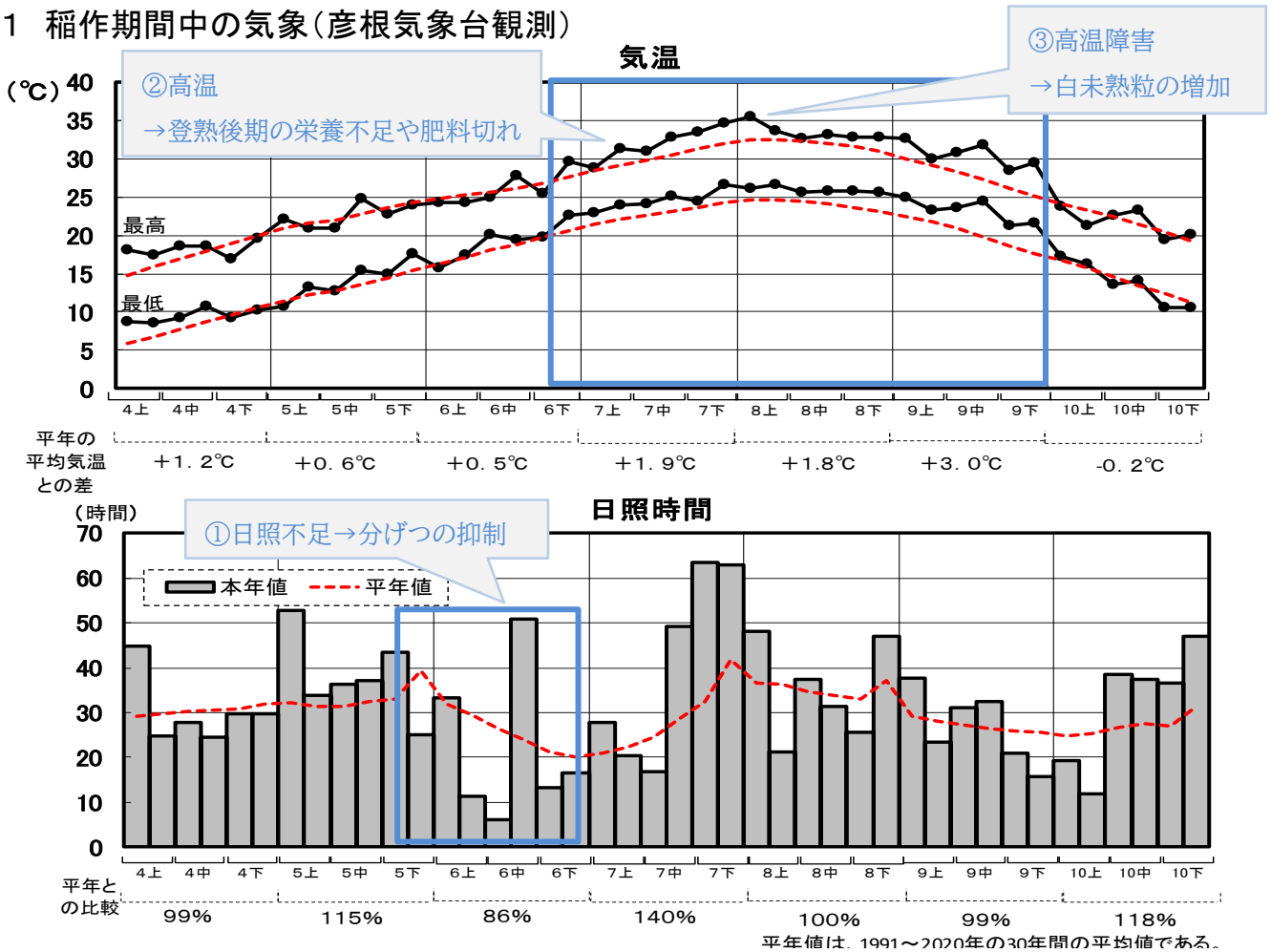


令和5年産米の作柄と今後の対策について

1 稲作期間中の気象(彦根気象台観測)



2. 作柄・品質の概況

1) 作況指数(11月10日農水省公表)

		予想収量 (kg/10a)	作況指数 (前年同期)
滋賀県	全県	504	97(101)
	湖南	511	97(101)
	湖北	490	98(101)
近畿		503	100(102)
全国		533	101(100)

2) 1等米比率(10月31日現在・農水省公表)

	1等米比率(%)		
	5年産※	前年同期	前年最終
滋賀県	56.0	66.6	65.1
近畿	52.5	60.1	60.7
全国	61.3	79.4	78.5

※ 水稻うるち・全銘柄平均
※ 前年最終は、R5年3月31日現在の速報値
※ 5年産はR5年10月31日現在の数値

3) 収量・品質低下の要因

- ① 【5月末～6月の日照不足】分けつが抑制され穂数が減少→減収
- ② 【6月末～9月の高温】稲体の窒素代謝の増加、登熟後半の栄養不足
→収量・品質の低下
- ③ 【7月中旬～8月上旬の高温】登熟前半の高温障害→白未熟粒の増加



3. 品種別の状況

品種名 (R5 作付比率(%))※1	収量※2 (平年比較)	1等米 比率(%)*3	前年 同期	概況
[早生] みずかがみ (10.9)	並～ やや少	86.3	88.6	<ul style="list-style-type: none"> ■ 6月が日照不足で経過したことで茎数が少なく推移し、穂数が平年より少なくなった。 ■ 7月下旬～8月上旬は高温となったが、品種特性である高温登熟性が発揮され、登熟が順調に進み、品質は平年並であった。
[早生] コシヒカリ (33.6)	並～ やや少	45.2	58.1	<ul style="list-style-type: none"> ■ 6月が日照不足で経過したことで茎数が少なく推移し、穂数が平年より少なくなった。 ■ 倒伏はほとんど見られなかったが、8月下旬までの高温の影響により登熟後半に栄養不足となることで、平年より減収した。 ■ 出穂期にあたる7月下旬から続いた高温の影響により、白未熟粒が目立ち、1等米比率は昨年を下回った。 ■ なお、一部のほ場ではいもち病や縞葉枯病、ごま葉枯病の発生で減収した。
[早生] キヌヒカリ (18.5)	並～ やや少	41.3	45.6	
[中生] 日本晴 (6.7)	並～ やや少	53.3	81.0	
[中生] きらみずき (一)	並～ やや少	85.2	—	<ul style="list-style-type: none"> ■ また、台風7号の接近に伴う強風により8月15日に出穂期を迎えたほ場では、不稔粒が発生し、収量減少の要因となった。
[中生] 秋の詩 (6.1)	並～ やや少	53.3	90.6	<ul style="list-style-type: none"> ■ 高温登熟性に優れる「きらみずき」の1等米比率は他品種と比べて高く、良好。

※1 R5 作付比率はみらいの農業振興課調べ ※2 収量は各農業農村振興事務所から生産者等に対する聞き取り結果から推定 ※3 「1等米比率」は10月31日現在の農水省公表値

4. 今後の対策

【気候変動に対応した技術の体系化と栽培管理の実践】

- ・ 水田の地力実態に応じた土づくりの推進
- ・ 肥料の効果を持続させるための施肥（追肥の積極的な施用）
- ・ 出穂前後各3週間の常時湛水管理の実践による高温障害の軽減
- ・ 高温耐性品種「みずかがみ」および「きらみずき」の作付拡大と、収量・品質の向上に向けた取組
- ・ 耕種的防除や発生予察に基づく防除など総合防除の実践

5. 具体的な取組(参考)

1. 収量・品質向上

栽培技術対策

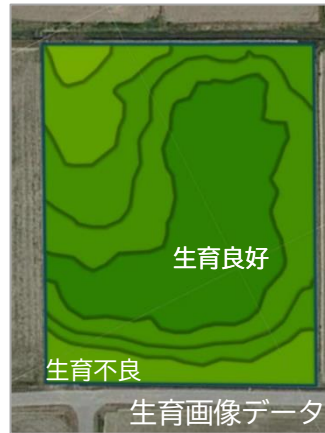
・ 今後も高温の影響が続くことを想定した技術対策を取りまとめ、啓発資料を作成し、農業者に提示しつつ、生産の安定化を図る。

スマート農業技術の活用

・ 人工衛星の生育画像データを活用し、高温による栄養不足を補うための追肥の必要性を判断し情報提供することや、ドローンの活用により効率的・省力的に散布する技術の普及に向けた取組。

「水田の土づくりマニュアル」の活用

・ 温暖化や麦・大豆とのローテーションに伴い、低下傾向にある水田の地力向上を図るための有機物の活用、効果的な土づくりを呼び掛け。



2. 病害虫防除

いもち病

・ 長雨や日照不足により発生が多くなり、発病すると白穂や不稔となり、収量や品質も低下する。
・ ほ場での発生状況をよく観察し適期に防除するとともに、余剰苗の除去など発病しにくい環境づくりに努める。



葉いもち



穂いもち

縞葉枯病(ヒメビウンカ)

・ ウイルスを保毒したヒメビウンカの吸汁によって感染し、発病すると穂は出ずくみ、不稔となる。
・ 収穫後は早期に耕耘しヒメビウンカの越冬場所となるひこばえを除去する。



発病した稲株



ヒメビウンカ



発病したひこばえ

ごま葉枯病

・ 出穂期以降の高温、特に夜温が高いと多発する。
・ 肥料切れが発病を助長するため、土づくりや施肥改善に努める。



ごま葉枯病の病斑

3. 近江米新品種「きらみずき」

令和5年産の生産状況等について

・ 作付面積約 55ha、生産者 74 名
・ 1等米比率は 85.2%(10月31日現在値)。
・ 単収の平均は 412kg/10a(189~626kg/10a)
・ 食味値の平均は 80(69~86)
※一般に食味値 80 以上が良食味米

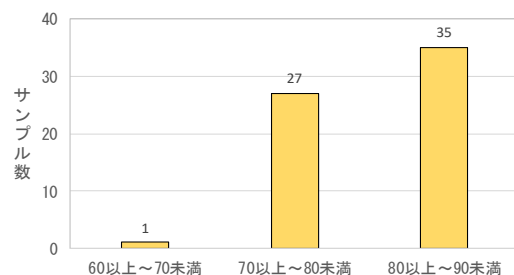


表 食味値の分布

令和6年産に向けた対策のポイント

- 令和5年産米の収量・品質等の検証
→土づくり、有機質肥料の適切な施肥、病害虫対策
- 試験研究や普及指導による栽培技術の改善
- 栽培暦の見直し

流通・販売の状況

・ 令和5年 10 月から県内の直売所等にて販売
・ 11 月 23 日、県内量販店にて大型 PR イベント開催
・ 量販店での販売価格(税抜き)
2,380 円/5kg
※「コシヒカリ」1,900 円/5kg 程度
・ 令和6年度は首都圏・京阪神で販路拡大を目指す。

